

都道府県別賞一等

## 父が僕達に残してくれたもの

熊本県 熊本大学教育学部附属中学校 一学年

甲斐 一朗

二〇一二年、日本へ帰国中の飛行機の中で赤ん坊の声が響き渡る。僕の弟がかなりわめいている。僕の母は深刻そうに涙目をして、未来を見つめていた。

この時僕たちは、それまで暮らしていた国から日本に突然、帰国しなければいけなくなったのだ。それは父の突然の死によるものだった。僕は当時三歳、僕たちの新しい旅はここから始まった。父は長い間、大手の日系企業で働いていた。僕は記憶喪失したのか、父の記憶は全くないが、みんなの人気者で明るい人であったようだ。祖父母はいつも口を揃えてこう言う。「あなた達のお父さんは本当に性格が良い人だったのよ」と。

ここからが本題だ。実は、父は生前、家族のために大きなお金を払っていた。そう、生命保険だ。誰もが入っている生命保険だが彼ほど膨大に生命保険にお金を払っていた人はいなかったらしい。特に僕が産まれてからはもっと払っていたらしい。「お父さんはいつも一朗とゆうちゃんの将来の夢を考えていたんだよ」と母が言っていた。生命保険とは、もしもの時に命のかわりに残された家族にお金が提供されるというものだ。人はよく「命はお金にかえられるものではない」という。僕も実際、最近までそう思っていた。例えばどんなに大金持ちでお金があっても寿命は伸ばせないし、新しい命も買えない。しかし父は自分の命を保険によりお金に変換させて僕たちに残してくれたのだ。まさしく父の命がお金にかわったという事だ。命はお金にかえられないという事と矛盾している。

では一体誰がこの生命保険のシステムを考えたのだろうか。ここから歴史を遡ると一八六七年ごろ、福沢諭吉がヨーロッパの『近代的保険制度』を紹介したことがきっかけだろう。ところが当時は「人の生死によって金儲けをするのか」と誤解され、庶民には理解されなかったみたいだ。だがその後、日清戦争、日露戦争で亡くなった多くの兵士の遺族に保険金が支払われたことで、広く一般に普及していったという経緯がある。確かに、実際、戦争などで大事な家族が失われた時に人は初めて当事者となり、生命保険の本当の意味がわかるのだろう。僕たちの家族もそうだったように。つまり「命はお金にかえられない」というのは、生きている命はお金にかえられないかもしれないが、亡くなった命は生命保険という先行投資によってお金にかえることができるのだ。それは、「残された家族の人生が安心して継続していきますように」という強い愛

## 第60回中学生作文コンクール

の願いによって可能になるのだ。僕の家族にとって生命保険から受け取ったお金は色んなものにかえられた。今住んでいる家、幼稚園、小学校、中学校でかかる費用、多分僕が気づいていないだけで、まだまだ沢山あるはずだが、僕の将来もそうだろう。僕には実は大きな希望があるのだ。根拠のない明るい未来を感じる時に何故か僕はワクワクするのだ。本当に父の命は色んなものにかえられて、僕たちの血や肉となり、今、希望に満ち溢れた僕がいる。これじゃ、父の命は僕が引き継いでいるという事になりはしないか。考えれば考える程、愉快になって父の存在が近くに感じられてくる。誰も知らないだろうが、僕は何か物を買った時にいつも『お父さんありがとう』というのを忘れないようにして心の隅で呟いている。そして今、僕は、父に胸を張って言える事が一つだけある。それは僕も必ず家族を一番に思いやる心を持つという事。

お父さんが生命保険にお金を沢山費やしていた理由が少しわかったかもしれない。